

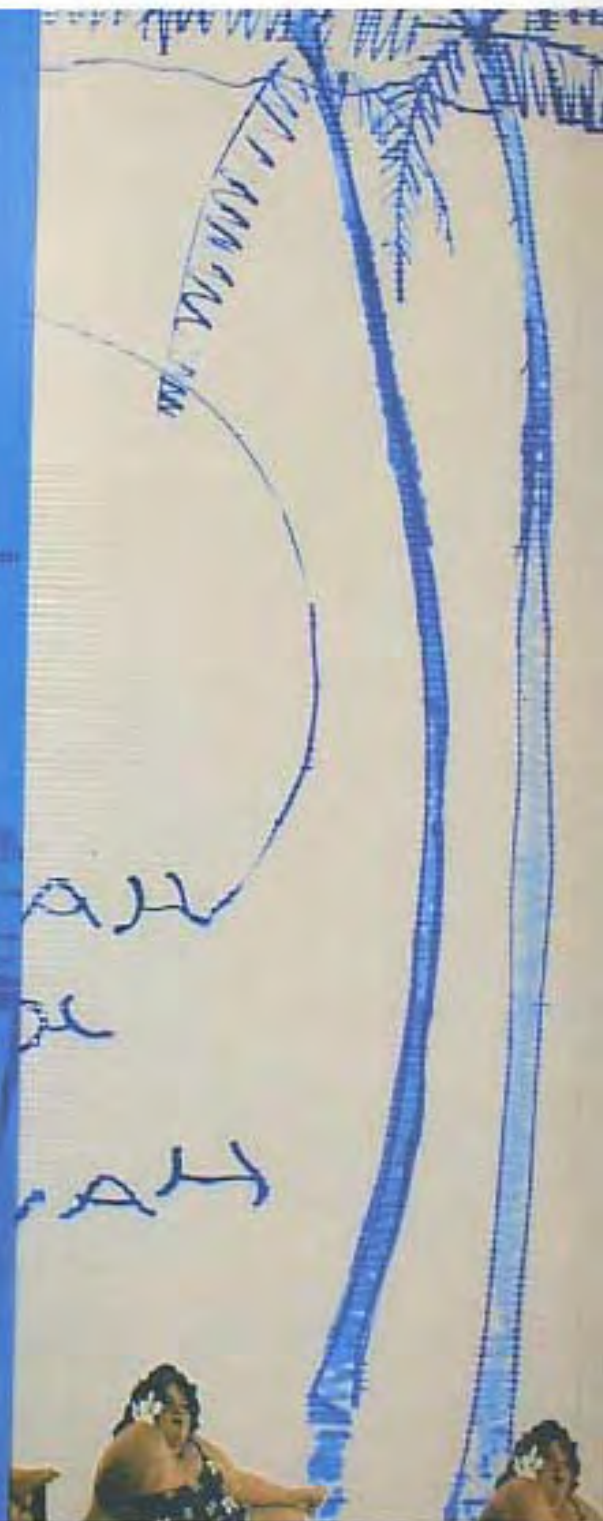
六花

俳句雑誌

りっか

12

designed by Tamako Tanaka



訪 戴

山田六甲

秋の蟬うらがへしゆく犬の鼻
胸突きの下野草を掴みけり
蕎麦待つて紅葉に穴のあいて来し
黒点の確かにありぬ秋落暉
石段のくづれしままや秋夕焼

しばらくは締切もなし柿啜る
秋灯や通りすがりの足湯して
湯に入る小銭を探す菊日和
石鹼が目に沁みて秋深まりぬ
そぞろ寒犬に舐められ手を洗ふ
尾を立てて石をまさぐる秋の鯉
鼻の奥寒くてガムを吐き出せり
真つ直ぐに行けば城あと残り菊
赤松に冬目の差してをりにけり

特別同人作品

六^{りっ}

卿^{けい}

集^{しゅう}

蛸壺

小田

元

犬の居ぬ鎖錆びたり野分後
 蛸壺のいびつに乾く涅槃西風
 蛸壺に祖父の命の続花活ける
 子別れの秋刀魚焼き中すぐ帰る
 炭火にて

(五十頁送り)

少年

梶浦玲良子

落つる日の腰のあたりを芒原
 長月の遠きところへ迷ひ箸
 枝豆の三つ子に双子ざんざ降り
 月光に男の乾く下り鮎
 少年にニツキの匂ひ花煙草

木の
実

木内美保子

稲の香や波打つ風に田が踊る
 木の実落つ一度つきりの音たて
 一跳びにいとど消えたり闇の中
 山日和はじけてころ栗笑ふ
 暁にまだ鳴いてゐる虫の居て

大切な

中村

房枝

冬雁や卒寿の翁に齡聞かれ
 顔見世の五時間ほどを隣り合ふ
 大切なひとと鍋焼餛飩かな
 灯切な雪見障子のこちから側
 並びぬてみな歳晩の窓あかり

百段

鳴海

清美

片方の翼落とすて昼寢覚
 秋めくや傘に受けたる雨音
 鉦叩けど行けども造地の
 ふり向けるば深き靴跡の虹
 百段の上には百段かかな

秋の蝶

二瓶

洋子

秋の蚊に食はれて後の祭なり
 秋の雲命終を守りをりに見失ふり
 秋の蝶や畳に天寿全うけり
 竹垣の崩れを抜けし秋の蝶す

年の瀬

松山

律子りっし

年の瀬は物の匂いと人の息
 歳晩やどつこい俺は生きている
 地球儀は地球儀季節という節目
 越冬燕公園に青いテント
 地球儀を回してみても年の暮れ

だぶだぶの野良着乾かぬ案山子かな

松本 安弘

ひよんの実をもらひて子安地藏かな

稲すずめ他人の空似の八字眉

鳩すずめ言葉かはせず秋暮るる

さりげなく秋さりげなく秋の風

案山子の着衣の質感が的確に表現されている。難をいえば案山子に野良着は平凡だが、どのような着衣でも案山子が纏っているのなら確かに野良着なのだ。秋晴れの天気が続いても、田んぼの中に立っている案山子の野良着は乾きにくいかと思う。掲句によって、来年は実際に案山子の野良着に触ってみたくなった。それだけ作品に人の心を動かす力が内蔵されているということだ。

あかんぼのおでこにこぼれかき氷

ことり

袂に手そはせて水を打つ夕べ

夕端居手に水晶をころがしつ

夜濯ぎの小さきものを干しにけり

絵扇の鳥の尾かすれをりにけり

かき氷を、母親が食べていたのか、赤ん坊に舐めさせようとしていたかは解らないが、匙からこぼれて、赤ん坊のおでこにかき氷が落ちた！。ここから先は読者が想像をすればよい。赤ん坊のビツクリした表情や、キョトンとした眼そして手足をバタバタさせて、やがて泣き出し、母親の慌てる姿まで鮮明に情景が浮かんでくる。掲句は結果を言っただけの句だ。これこそ言葉の結晶である。

檀木集

雁

水谷ひさ江

初雁や祝儀袋を買ひに出で
初雁や港神戸をひとめぐり
山形に鉤形になり雁の列
人工の島に大樹や雁渡る
かりがねや真珠涙の形して

夜の秋

三井孝子

箸並べ膳の整ふ夜の秋
列に入りアイスクリーム一つ買ふ
野分後の一日おいて花起こす
子を離し暴れる花火点火する
この頃の柔き大根菜雲高し

黙禱

宮森毅

沢蟹の手をふり上げて岩陰へ
きりぎりす墓石の影に身を移す
星の恋割り込むごとく赤き星
カーテンに殻を残して蝉の声
黙禱に雲は崩れて原爆忌

菜根譚

六甲選

満月や神戸元町中華街

角田 信子

句の表だけを讀めば、中秋の名月が中華街に上がっただけの報告の句にすぎないが、満月と中華街の取り合わせによって俳句は俳句となった。正岡子規も柿と法隆寺の取り合わせが出来たことを手放しで喜んでゐる。実際は法隆寺で作った作品ではないらしいが法隆寺と取り合わせたことによつて子規の句は俳句的生命を吹き込まれた。そこが俳句における創作である。つまり材料と場所をどのように取り合わせるかによつて報告と俳句的詩の分かれ目になるともいえよう。

座すごとくぶら下がりゐる青瓢

K O K I A

「ごとく俳句は失敗しやすい」とよく、言われるが、その理由は比喩が常識の範囲をなかなか超えられないからで、おおかたの場合手垢の付いた比喩で失敗するのである。

掲句は俳句の嫌う理屈を多少感じるが、青いひょうたんを観察しているうちにまるで人間が座っているような感じがしてきた。いわゆる擬人化である。さらに座ってはいるけどぶらさがっているぞと、素直に把握した。俳句はやはりよく物を見るべしということを教えてくれる。(以下略)

落雷のたびに目を剥く写楽かな

貝森 光大

写楽の描いた役者が落雷のたびに目を剥いたというのは嘘であるけれど、なんだか落雷に驚いているように見えてくるのも実は写楽の極端なデフォルメーションによる画法と作者の言術のなせる技のせい、落雷とは何の因果もないのだが、さも因果関係があるように思わせる幻術でもある。

「お前何言ってるんだ?!」と叱られそうな事を書くのも幻術にはまってしまったのか知らん。

六花集



六甲選

出口 誠

石庭で鉄道語る冬至かな
つきあへと言はれ従ふクリスマス
兎・栗鼠居てパパ居ないクリスマス
靴下にハートの刺繍クリスマス
お姫様まだお冠大みそか

松本 安弘

平居 濤子

ひよんの実をもらひて子安地藏かな
だぶだぶの野良着乾かぬ案山子かな
稲すずめ他人の空似の八字眉
鳩すずめ言葉かはせず秋暮るる
さりげなく秋さりげなく秋の風

菊谷 潔

わかやぎすずめ

うす闇や野面に百合の浮かびたる
うづくまるひぎの細さや秋の風
この虫のしたり顔なり秋の風
かまきりは夢の続きで鎌を研ぐ
叢の奥なつかしや虫の声

歩き初む二歩が三歩に今朝の秋
半分に切られ焼かれし秋刀魚の目
病室の窓を磨けば秋の雲
木犀の香りの中に家屋朽ち
朝顔の二世代同居プランター
朝顔や双子乗せゆく乳母車
目印は靴下の色運動会
子供らの成長走る運動会
歓声と砂ぼこり立て運動会
秋晴に友の笑顔を探しおり